

井相田 C 遺跡 11

井相田 C 遺跡第 13 次調査報告

2016

福岡市教育委員会

井相田 C 遺跡 11

井相田 C 遺跡第 13 次調査報告



遺跡略号・ISC
調査番号・1412

2016

福岡市教育委員会

序

福岡市は、古来より大陸文化の門戸としての役割を担い発展してきた歴史をもち、地中には多くの文化財が分布しています。本市では、これら文化財の保護に努めているところでありますが、各種の開発事業によってやむを得ず失われる文化財に関しては、発掘調査を行い、記録保存を行うことで後世に残しています。

本書は博多区井相田2丁目に所在する井相田C遺跡の第13次調査の報告書です。今回の調査では、弥生時代前期、古墳時代後期、古代の各時期の住居や掘立柱建物が検出され、本遺跡を考えるうえで重要な発見となりました。

本調査の成果が文化財保護への認識と理解を深める一助となり、学術研究の資料として活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査に際してご理解とご協力をいただきました社会福祉法人福岡障害者支援センター様をはじめとした関係者の方々に、心から感謝の意を表します。

平成28年3月25日

福岡市教育委員会

教育長 酒井 龍彦

例言

1. 本書は、福岡市教育委員会が平成 26 年 6 月 2 日から 8 月 29 日まで福岡市博多区井相田 2 丁目で実施した、井相田 C 遺跡第 13 次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺構は、竪穴住居を SC、掘立柱建物を SB、土坑を SK、柱穴を SP、不明遺構を SX とそれぞれ記号化し、すべての遺構を 01 から通して番号を付した。なお、柱穴は、調査区の任意のグリッドを 1 つの単位とし、グリッドごとに 01 から通し番号を付した。
3. 本書で使用した方位は、すべて国土地標北（世界測地系）である。
4. 本書に掲載した遺構実測図、遺構写真撮影は加藤良彦、中尾祐太による。
5. 本書に掲載した遺物実測図、遺物写真撮影、製図、執筆、編集は中尾による。
6. 本書にかかわる記録と遺物は、整理後福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、管理・活用する。

調査番号	1412	遺跡略号	ISC - 13
調査地	博多区井相田 2 丁目 2 番 10	分布地図番号	12 (麦野) 2630
事業対象面積	1193.44 m ²	開発面積	715 m ²
調査実施面積	411 m ²	事前審査番号	25 - 2 - 1325
調査期間	140602 ~ 140829		

本文目次

I はじめに - 1

1. 調査にいたる経緯 - 1
2. 調査の組織 - 1
3. 遺跡の立地と歴史的環境 - 2

II 調査の記録 - 7

1. 調査の概要 - 7
2. 遺構と遺物 - 8
 - 弥生時代の遺構と遺物 - 8
 - 古墳時代の遺構と遺物 - 12
 - 古代の遺構と遺物 - 25
 - その他の出土遺物 - 36

III 小結 - 36

挿図目次

- Fig1 周辺遺跡分布図 (1/25,000) - 3
Fig2 井相田C 遺跡位置図 (1/5,000) - 3
Fig3 13次調査地点位置図 (1/1,000) - 4
Fig4 13次調査地点遺構配置図 (1/200) - 5
Fig5 調査区割付図 (1/200) - 6
Fig6 調査区壁面上土層断面図 (1/50) - 7
Fig7 SK05 実測図 (1/40) - 8
Fig8 SK08 実測図 (1/40) - 8
Fig9 SK12 実測図 (1/40) - 9
Fig10 SK13 実測図 (1/40) - 9
Fig11 SK08・12・13 出土遺物実測図 (1/3) (1/1) - 11
Fig12 SC01・02 実測図 (1/60) - 12
Fig13 SC01 出土遺物実測図 (1/3) - 13
Fig14 SC10・11 実測図 (1/60) - 14
Fig15 SC10・11 断面見通し図 (1/60)
SC11 出土遺物実測図 (1/3) - 15
Fig16 SC17 実測図 (1/60)
SC17 出土遺物実測図 (1/3) - 16
Fig17 SK30 実測図 (1/40) - 17
Fig18 SK30 出土遺物実測図 1 (1/3) - 18
Fig19 SK30 出土遺物実測図 2 (1/3) - 20
Fig20 B - 3 SP07 実測図 (1/20) - 22
Fig21 B - 3 SP07 出土遺物実測図 (1/3) - 22
Fig22 SX31 実測図 (1/60) - 23
Fig23 SX31 出土遺物実測図 (1/3) (1/1) - 24
Fig24 SB26 実測図 (1/60) - 25
Fig25 SB27 実測図 (1/60) - 26
Fig26 SB28 実測図 (1/60) - 27
Fig27 SB29 実測図 (1/60) - 28
Fig28 SX32 実測図 (1/60) - 29
Fig29 SX32 出土遺物実測図 1 (1/3) - 30
Fig30 SX32 出土遺物実測図 2 (1/3) - 31
Fig31 SX32 出土遺物実測図 3 (1/3) - 32
Fig32 SX32 出土遺物実測図 4 (1/3) - 34
Fig33 包含層出土遺物実測図 (1/3) (1/1) - 34
Fig34 ピット出土遺物実測図 (1/3) - 35

図版目次

- PL1 SK08 (南から) - 9
PL2 SK13 (北から) - 9
PL3 SK08 出土遺物 - 11
PL4 SC01・02 (西から) - 12
PL5 SC10・11 (北東から) - 14
PL6 SC17 (北西から) - 16
PL7 SK30 遺物出土状況 (南西から) - 17
PL8 SK30 出土遺物 1 - 19
PL9 SK30 出土遺物 2 - 21
PL10 B - 3 SP07 遺物出土状況 (南から) - 22
PL11 SX31・32 (南東から) - 24
PL12 SX31 出土遺物 - 24
PL13 SB26 (南東から) - 25
PL14 SB27 (北西から) - 26
PL15 SB28・29 (北西から) - 27
PL16 SX32 出土遺物 1 - 30
PL17 SX32 出土遺物 2 - 33
PL18 包含層出土遺物 - 34
PL19 調査第1区全景 (南西から) - 37
PL20 調査第2区全景 (南西から) - 37

I はじめに

1. 調査にいたる経緯

福岡市教育委員会は、福岡市博多区井相田2丁目2番10地内における児童発達支援センター建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成26年3月26日付で受理した。

申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である井相田C遺跡に含まれているため、これを受けた埋蔵文化財審査課事前審査係が確認調査を実施したところ、現地表面下120cmで遺構が確認されたため、遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。

協議の結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、建物部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

以上の合意に基づいて、平成26年5月28日付で、社会福祉法人福岡障害者支援センターを委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年6月2日から発掘調査を、翌平成27年度に資料整理および報告書作成を行うこととなった。

2. 調査の組織

調査委託 社会福祉法人福岡障害者支援センター

調査主体 福岡市教育委員会

発掘調査 - 平成26年度 整理報告 - 平成27年度

調査総括 文化財部埋蔵文化財調査課

課長 常松 幹雄

同課調査第1係長 吉武 学

調査庶務 埋蔵文化財審査課管理係

管理係長 内山 広司(平成26年度)

大塚 紀宣(平成27年度)

同係 川村 啓子

事前審査 埋蔵文化財審査課事前審査係

事前審査係長 佐藤 一郎

同係主任文化財主事 池田 祐司

同係文化財主事 板倉 有大

調査担当 埋蔵文化財調査課調査第1係

主任文化財主事 加藤 良彦

同係文化財主事 中尾 祐太(現調査第2係)

発掘作業 唐島栄子 岩本三重子 桑原美津子 村山巳代子 中村桂子 中村尚美 安高邦晴

来野孝子 安東昌信 許斐拓生 上野照明 篠原俊夫 大坂由布子 田中ゆみ子

遠竹卓馬 原野容子 大西晶子 秋田雄也 坂本夏菜

整理作業 国武 真理子 齋田 慧

3. 遺跡の立地と歴史的環境

福岡平野は、北東を三郡山地からのびる丘陵性山地、南西を脊振山地、および脊振山地から派生した丘陵によって画された小平野である。この平野内には四天王寺山地から発し北流する御笠川、脊振山系から発し平野中央を北流する那珂川がそれぞれ博多湾に流れ込んでおり、この両河川によって形成された沖積地が広がっている。平野内の沖積地にはそれぞれ微高地が点在しており、各微高地上には多くの遺跡が存在する。井相田C遺跡もそのひとつで、平野の市域南端部、御笠川中流域左岸の微高地上に位置する。

井相田C遺跡では、本調査も含めて13次の調査が実施されている。1次調査地点で旧石器時代、縄文時代の石器が出土しているが、ある程度まとまった遺構が確認されるのは弥生時代前期以降で、この時期が集落の形成期といえよう。3次調査・4次調査で該期の遺構が検出されている。3次調査では竪穴住居2棟、土坑14基が検出されており、4次調査では遺構の残存状態が悪く断片的ではあるが、貯蔵穴と考えられる土坑が複数検出されているほか、流路からは土器、石器を含む包含層が堆積している。その他の明確な弥生時代の遺構は確認されておらず、7次調査地点で弥生時代後期と考えられる集落（柱穴多数）とそれを限る区画溝が検出されている程度である。

その後は散漫な状態を呈するが、古墳時代後期になると急激に集落が拡大する。複数の調査地点で、遺構・遺物とともに、多数確認されている。3次調査では竪穴住居、掘立柱建物、および溝が複数検出されており、溝がそれぞれ直交することから、区画を一つの単位とし、各区画は住居複数棟と掘立柱建物1棟ないし複数棟で構成されていたことが明らかになった。4次調査でも、古墳時代中期から8世紀にいたる遺構がみられるなか、微高地の縁辺部に平行、直交して区画溝が掘削されており、なかに竪穴住居と掘立柱建物が設けられている。4次調査区の北に位置する8次調査地点でも溝が複数検出されているが、そのうちの2条に関しては、区画溝の可能性が指摘されている。本書で報告する13次調査は3次調査地点の南に近接しており、同じく古墳時代後期の遺構が検出されている。古墳時代後期の遺構に関しては区画溝こそ検出されていないものの、同時期の竪穴住居が確認されたことから一連の集落と考えられる。なお、12次調査地点は13次調査地点の東に位置するが、土坑3基と柱穴のみで、13次調査地点も含む集落域の東を限る縁辺部であると考えられている。

古代になると様相が変わり、一般的な集落ではなく公的な性格をもつと考えられる遺構が多く検出されている。1次調査では、奈良時代～平安時代の掘立柱建物を主とする広域な集落が検出されており、人面墨書き土器や墨書き土器も出土している。1次調査地点の北に位置する2次調査地点ではこの集落の北側が検出され、両調査から、該期の集落が微高地の北限と一致することが明らかになった。この古代の集落がどこまで広がるかは明らかではないが、5次調査地点・7次調査地点ではそれぞれ掘立柱建物と柱穴が検出されており、両地点が東と南の縁辺部付近と考えられる。その他、1次調査から10次調査にかけて直線的な溝が検出されているが、これはいわゆる「水城東門ルート」と呼称される古代官道の側溝一部をなすと考えられる。

中世以降になると遺構・遺物ともに減少するが、1次調査・2次調査では中世から近世にかけての水田が検出されており、2次調査の池状の遺構からは、近世の墨書き木札等の信仰資料が出土している。

以上、これまでの調査成果を時期ごとに概観したが、本遺跡の中心となる時期は古墳時代後期および古代であり、本書で報告する第13次調査でも同時期の遺構と遺物を多く確認している。

1. 井相田 C 遺跡
2. 井相田 B 遺跡
3. 井相田 A 遺跡
4. 南八幡遺跡
5. 仲島遺跡
6. 麦野 A 遺跡
7. 麦野 B 遺跡
8. 麦野 C 遺跡
9. 三筑遺跡
10. 笹原遺跡
11. 高畠遺跡
12. 井尻 A 遺跡
13. 井尻 B 遺跡
14. 井尻 C 遺跡
15. 五十川遺跡
16. 諸岡 A 遺跡
17. 諸岡 B 遺跡



Fig1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)



Fig2 井相田 C 遺跡位置図 (1/5,000)

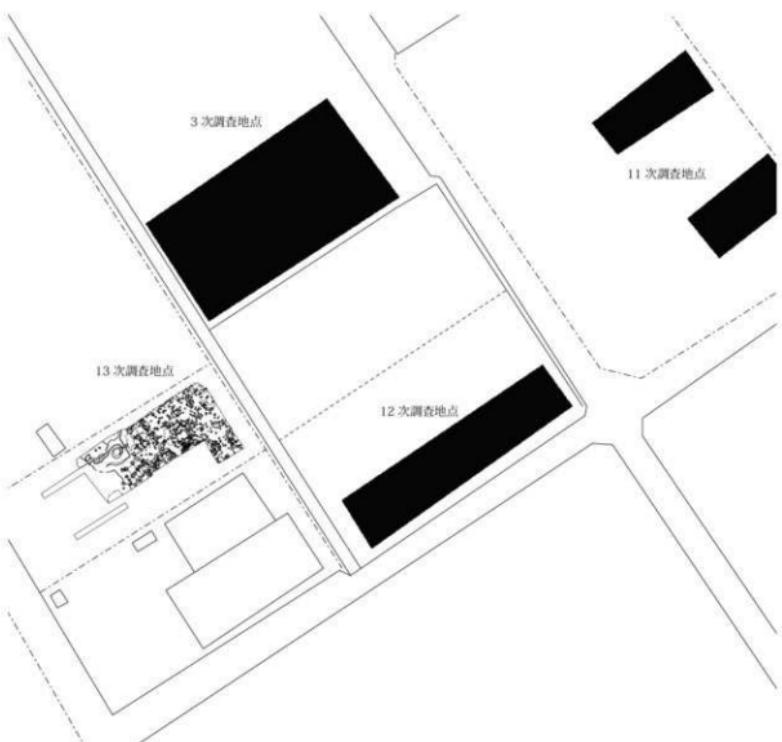


Fig3 13次調査地点位置図 (1/1,000)



Fig4 13次調査地点遺構配置図(1/200)



Fig5 調査区割付図 (1/200)

II 調査の記録

1. 調査の概要

第13次調査区は、井相田C遺跡の中央部やや北寄りに位置しており、北に第3次調査地点、南に第1次・2次調査地点、東に第12次調査地点が近接する。

本調査地点の基本層序はFig6に示した通り、現地表面下約110cmまでは、擾乱および現代客土で、以下に旧水田層、および床土が堆積している。その下、標高11.1m前後で灰褐色砂の地山面となり、この上面で遺構を検出した。

調査は、2014年6月2日から開始した。廃土置き場の都合上、調査区を東西で2分割し、東側から調査を行った。削平のため遺構そのものの残りは極めて悪かったものの、ある程度まとまった遺構が検出された。順次記録作業を行い、第1区の調査を7月22日に終え、翌日反転。第2区は西に向かって地形が徐々に落ちており、一定のところで急激に落ち込むことが明らかになった。これは当初調査区外に所在すると考えていた旧河川と判断し、遺構が残る部分を第2区とし、先に調査を進めた。第2区の調査は8月25日に終了し、埋戻し後、第2区の西側にトレンチを掘削。先の予想のとおり、河川ということが分かり、土層記録後に埋戻した。その後、わずかに堆積していた包含層を掘削。この作業と同時に機材撤収作業等を行い、8月29日に調査を終了した。

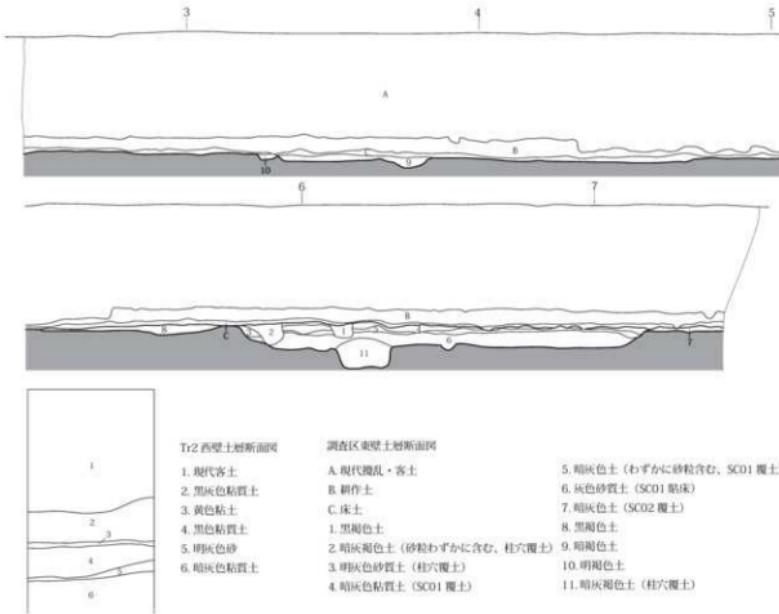


Fig6 調査区壁面土層断面図 (1/50)

2. 遺構と遺物

・弥生時代の遺構と遺物

SK05 (Fig7)

調査区の北東 (B - 2) で検出した。平面不整形の土坑で、北から 2 つのゆるやかな段がつき南側で柱穴状に落ち込む。

調査区には同様の不整形土坑が複数存在するが、いずれも人力的なものというより、倒木などの自然的要因による可能性が強い。

SK05 も同様に自然的な要因が考えられるが、出土遺物が下記の SK08 と接合するため掲載した。

出土遺物は弥生時代前期の甕、鉢の小片である。詳しくは SK08 出土遺物で説明する。

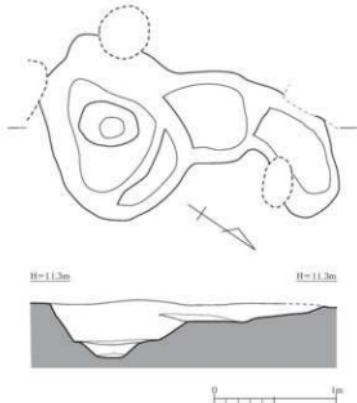
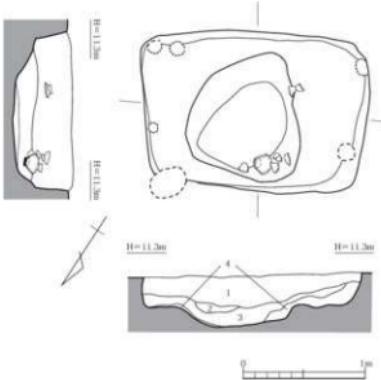


Fig7 SK05 実測図 (1/40)

SK08 (Fig8・PL1)

調査区の中央やや東寄り (C - 2 ~ 3・D - 2 ~ 3) で検出した。平面形は短辺が 135cm 前後、長辺が 190cm 前後の整った長方形を呈する。他の遺構の状況から考えてかなり削平されていると考えられるが、残存部の深さは 40cm で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。主に下層から弥生時代前期の土器が出土した。

1 は甕である。大方の器形は分かるものの、胴部中位が欠損するため、図上復元している。SK05 で出土した小片数点と接合する。いわゆる如意形口線の甕で、口線部は比較的丁寧なヨコナデを施し、口唇部にはやや浅い刻目を施す。内面ナデ仕上げで、外面上にはハケを施す。2 は鉢である。1 と同様、SK05 出土遺物と接合する。全体の 1/3 を欠損するものの残りはよい。内外面ともに丁寧なミガキを施している。焼成は極めて良好で色調は橙色を呈する。3 は甕の口線部である。



1. 品灰褐色泥砂礫土 (1 mm 以下の砂礫多く含む)
2. 品灰褐色砂質土 (品灰褐色土、黒灰色粘質土ブロックを 1/3 含む)
3. 品灰褐色砂質土 (黒灰色粘質土ブロックを 1/2 含む)
4. 黑色混土泥塊

Fig8 SK08 実測図 (1/40)



PL1 SK08 (南から)



PL2 SK13 (北から)

SK12 (Fig9)

調査区の東部 (C - 4) で検出した。短辺 150cm、長辺 196cm で、長辺の北側がやや膨れる不整形ぎみの楕円形を呈する。深さは残存部で約 45cm。遺構内部を柱穴によって切られている。以上の理由により、出土遺物は極めて少ないが弥生時代前期の土器が出土している。図示し得たのは以下の 2 点のみである。

4 は甕の口縁部である。刻目突帯文土器で、突帯はシャープで刻目は比較的浅い。5 は如意形口縁をもつ甕の口縁部か。

SK13 (Fig10・PL2)

調査区の東部 (D - 4)、SK12 の南西で検出した。短辺 164cm、長辺 236cm の整った長方形を呈する。深さは約 20cm。残存部はわずかであるが壁面はゆるやかに立ち上がる。出土遺物は弥生時代前期の遺物であるが、いずれも小片で図示し得たのは以下の 4 点のみである。

6、7 は甕の口縁片。6 は如意形甕の口縁部で端部にヘラ状工具による刻目を施す。刻目は浅い。調整は内外面ともに摩耗のため不明瞭。7 は刻目突帯文土器。突帯はやや細めで、上下をしっかりとヨコナデし、比較的きれいな三角形を呈する。刻目はやや浅いが丁寧で、間隔は比較的密である。外面にわずではあるが、やや粗い横方位のハケ目を残す。8 は甕の胴部片である。胴上半部で、羽状文を施す。9 は壺の口縁片。端部を肥厚させたものと考えられる。10 は部分的に明らかではないが、鉢の底部片か。ヨコナデによって底部の境が強調される。胴部もわずかに残存しており、外面にはミガキの痕を残す。他の遺物より若干古い時期のものか。11 は碧玉製の管玉である。

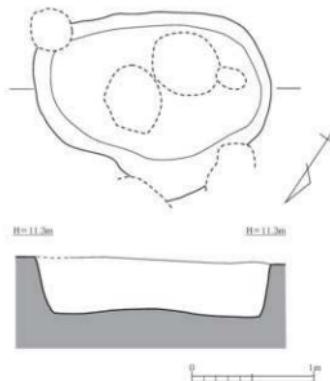
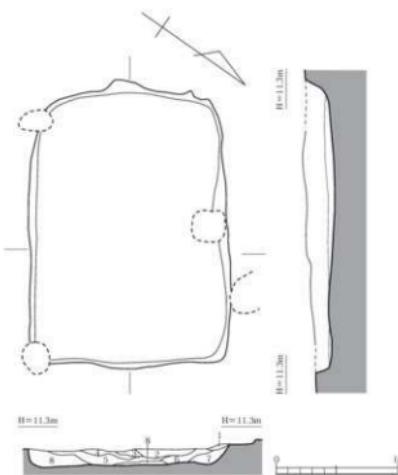


Fig9 SK12 実測図 (1/40)



1. 灰褐色泥質砂礫土 (5mm以下の砂礫を1/3、黒灰色粘質土ブロックを1/4含む)
- 2・5. 灰褐色泥質砂礫土 (黒灰色粘質土ブロックを1/2含む)
- 3・7. 灰褐色泥質砂礫土 (黒灰色粘質土ブロックを2/3含む)
- 4・6. 灰褐色泥質砂礫土 (黒灰色粘質土ブロックを1/3含む)
8. 灰褐色泥質砂礫土 (5mm以下の砂礫を1/4、黒灰色粘質土ブロックを1/4含む)

Fig10 SK13 実測図 (1/40)

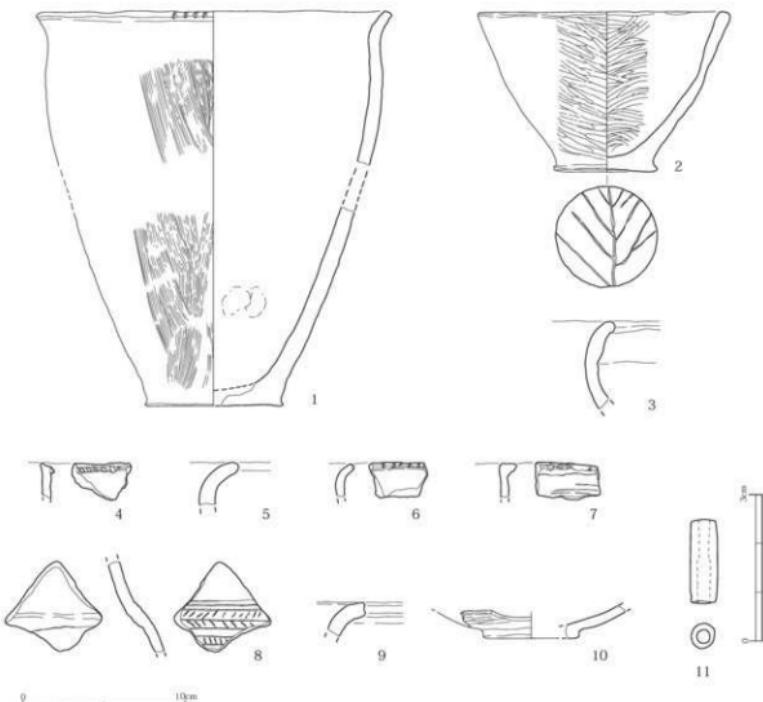


Fig11 SK08 · 12 · 13出土遺物実測図 (1/3) (1/1)



PL3 SK08出土遺物

・古墳時代の遺構と遺物

SC01・02 (Fig12・PL4)

調査区の東南端 (A-6~7) で検出した。壁際に位置しており、全体の半分程度しか検出できておらず、残りは調査区外の東にのびる。両者は切り合っており、SC01がSC02を切る。

SC01は西側の南北辺が395cm、東西辺が195cm以上の隅丸方形を呈する。平面ははっきり検出できたものの削平のため残りが悪く、わずか10cm程度しか残存していない。西壁で竈を検出したが、これも痕跡程度である。壁溝は南北分しか確認できず。主柱穴も北側では確認できなかった。出土遺物はいずれも小片で量も少なく、図示し得たのは以下の2点である。

12は須恵器壺蓋である。器形は全体的に丸みを帯び、口縁端部も丸くおさめる。13は壺身片。小片のため径をだすことができなかった。垂直に近く立ち上がり、口縁端部にはわずかに稜が入る。器形については丸みを帯びるものと考えられる。以上の出土遺物から時期は古墳時代後期と考えられる。

SC02は、そのほとんどをSC01に切られており、残りも悪いため、全容は明らかではない。出土遺物も時期不明の土器の小片が3点のみしか出土しておらず、時期は不明である。しかし、SC01・02はそれぞれ軸がほぼ同じであり、建て替えの可能性も考えられることから、両者に大きな時期差はないと考えられる。

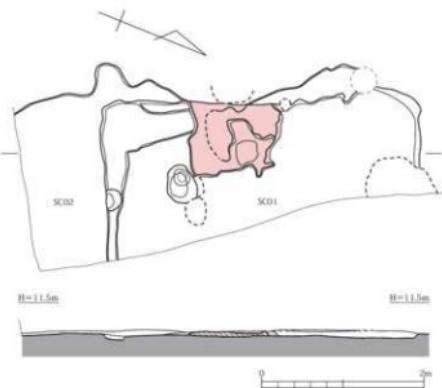


Fig12 SC01・02 実測図 (1/60)



PL4 SC01・02 (西から)

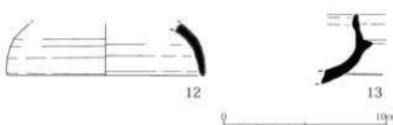


Fig13 SC01 出土遺物実測図 (1/3)

SC10・11 (Fig14・15・PL5)

調査区の東側、南壁沿い (B - 5 ~ 6・C - 4 ~ 5・D - 5) で検出した。共に住居のプランは確認できるが、調査区が直角に折れる部分で検出したため、住居内については一部を検出したにすぎない。SC01・02 同様、両住居は切りあっており、SC10 が SC11 を切る。

SC10 は東西辺 390cm、南北辺 210cm 以上の方形を呈する住居である。削平のため深さは 10cm 程度しか残存していない。平面プランこそ整っているものの、東側半分で検出できた壁溝はこれに沿わず、かつ溝の床面は凹凸が著しい。また、竈と考えられる焼土は住居の中央から西側にずれた位置で確認した。SC10 の主柱穴と考えられる柱穴は東側で 1 基のみ検出した。出土遺物には須恵器、土師器の小片の他、弥生土器の小片がわずかにあるが、いずれも小片のため図示し得なかった。時期は他の住居と同時期の古墳時代後期と考えておきたい。

SC11 は 634cm × 450cm 以上の、東側の一部がいびつな不正方形を呈するやや大型の住居である。SC10 同様、残りは悪い。主柱穴は 1 基のみ確認できた。壁溝は断片的にしか検出されず、SC10 同様、床面の凹凸が著しい。出土遺物には古墳時代後期と考えられる須恵器、土師器が複数点出土したが、いずれも小片のため、図示し得たのは以下の 1 点のみである。

14 は須恵器環身である。やや扁平気味で口径は小さい。口縁は受部から低く立ち上がり、若干内傾する。口唇部に段はないが、直下に稜線がめぐる。ヘラケズリの範囲は狭い。

SC17 (Fig16・PL6)

調査区の中央、南壁沿い (E - 4 ~ 5・F - 4 ~ 5) で、SBSB27 に切られる形で検出した。475cm × 300cm 以上の住居である。他の住居と同様、検出できたのは全体の半分程度で、残りは調査区外へのびる。削平されているものの、他の住居と比較すると若干残りは良く、壁溝も浅いながら壁面に沿う形で検出できた。竈および明確な主柱穴は確認できていない。出土遺物も他の住居と比較してやや多く、須恵器、土師器がいずれも小片ではあるが多数出土している。図示したのは以下の 7 点である。

15 ~ 18 は須恵器環身片である。15 は口縁が内傾し外反気味の低く立ち上がる口縁をもち、端部はわずかに欠損するが、丸くおさめたものと思われる。16 の口縁は垂直に近く立ちあがり、口縁端部には水平に近い面をもつ。17 は立ち上がりが低く内傾し、やや強めに外反する口縁部をもち口縁端部は丸くおさめる。18 は受け部から口縁端部まで直線的に立ち上がり、内傾する口縁をもつ。19 は須恵器環蓋である。体部と天井部の境にわずかに突出する稜をもち口縁端部にはわずかにではあるが段が認められる。环身より古相を示す。20 は土師器甕である。復元口径は 17cm 前後で、するどい稜をもつ頸部からやや外反しながら立ち上がる口縁をもち、端部を下にわずかに摘み出す。内面にはケズリの痕跡が残り、ケズリによって屈曲部を突出させる。胴部は残存していないが、おそらく胴が張るものと考えられる。21 は土師器壇である。胴上半から口縁部が残存。半球ないしは扁球形の体部から直線的に立ち上がり口縁部は丸くおさめる。器壁はやや厚い。摩耗のため外面の調整は不明瞭。内面には強いナデもしくは板ナデ状の痕跡をわずかに残す。ここで挙げた遺物は、それぞれで若干の時期差があるものの、古墳時代後期に属すると考えられ、遺構もこの時期のものと考えられる。

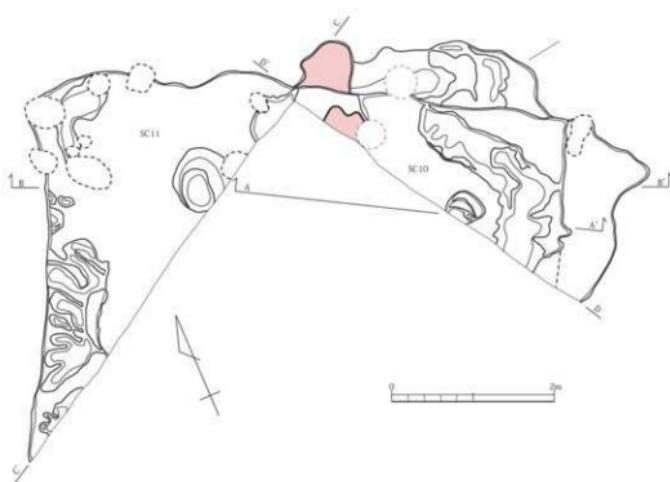
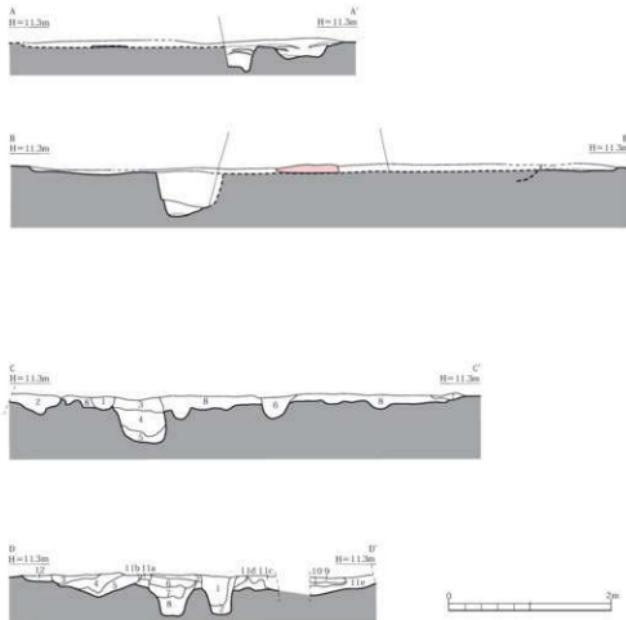


Fig14 SC10・11 実測図 (1/60)



PL5 SC10・11 (北東から)



- | 土層 C | 土層 D |
|-----------------------|------------------------------|
| 1. 暗茶褐色混砂礫土 (砂礫少量) | 1. 黒褐色混砂礫土 (砂礫少量) |
| 2. 暗灰褐色混砂礫土 (SC10 貼床) | 2. 暗灰褐色土に灰色砂質土ブロックをわずかに含む |
| 3. 暗茶褐色混砂礫土 | 3. 暗灰褐色混砂礫土 |
| 4. 黑褐色土 | 4. 黒灰色砂質土 |
| 5. 黄灰色砂質土 | 5. 暗茶褐色土 |
| 6. 黑褐色土 | 6. 暗灰色混土砂礫 |
| 7. 黑色粘質土 (SC11 貼土) | 7. 黑色粘質土砂礫土に黒色粘質土ブロックをわずかに含む |
| 8. 暗灰褐色混土砂礫 (SC11 貼床) | 8. 黑褐色土 |
| | 9. 灰褐色粘質土 (電) |
| | 10. 硬土層 (電床面) |
| | 11a. 黑色混土砂礫 |
| | 11b. 暗灰褐色混砂礫土 (砂礫1/3程度) |
| | 11c. 暗灰褐色混砂礫土 (砂礫わずか) |
| | 11d. 灰色混土砂礫 |
| | 11e. 暗灰褐色混砂礫土 (砂礫やや多く含む) |
| | 12. 黑色粘質土 (SC11 貼土) |

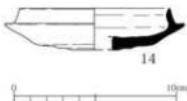


Fig15 SC10・11 断面見通し図 (1/60) SC11 出土遺物実測図 (1/3)

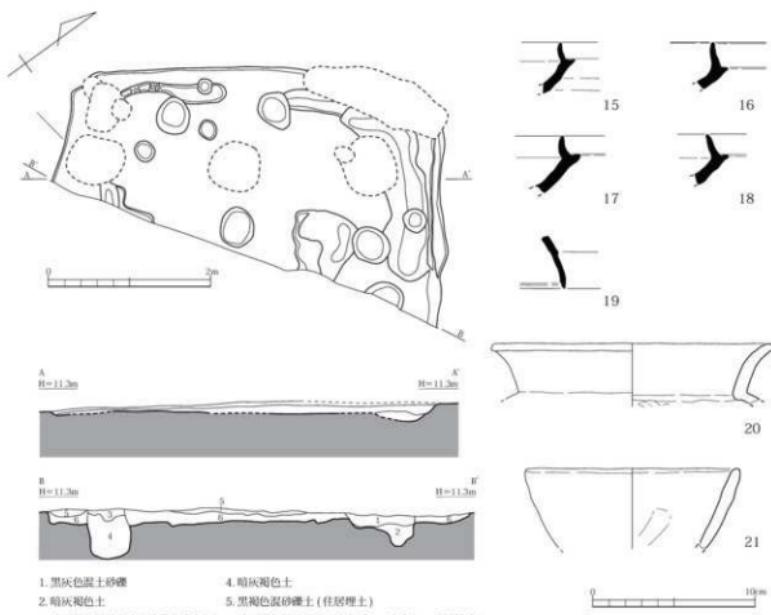


Fig16 SC17 実測図 (1/60) SC17 出土遺物実測図 (1/3)



PL6 SC17 (北西から)

SK30 (Fig17・PL7)

調査区西側の落ち際、SX31・32 の北西 (J - 1 ~ 2) で検出した。SX31・32 を掘削中、土器が集中していたため精査したところ、土坑と判明したもので、当初から一つの遺構として上面で検出していない。そのため、遺構の上部を掘りすぎた形になった。本来は、遺物検出のレベルまで遺構が残っていたものと思われる。残存する部分は、長さ 150cm、幅 100cm のややいびつな楕円形を呈する。おそらく本来あった上面も、同様の楕円形であったと考えられる。記録した深さは約 8 cm であるが、土器群から 30cm 前後に復元できる。詳しくは SX31・32 の項で述べるが、溜井もしくはその他の水に関する施設と考えられ、これに近接する SK30 は、それに伴う祭祀土坑と考えられる。出土遺物は以下のとおり。

22 ~ 24 は須恵器环蓋である。22 は扁平な天井部をもち、体部との境にやや鋭い稜を設ける。口縁は内側に強く屈曲しながら立ち上がる。23 は天井部がやや平坦をなす扁平気味の器形で、ゆるやかに立ち上がる。口縁端部は丸くおさめ、やや厚い。24 は、全体的に丸みを帯びた器形で、天井部と体部には明瞭な境をもつことなく口縁部へとつながる。25 ~ 27 は須恵器環身である。25 は扁平気味で器高が低い。天井部は平坦で中央部が窪む。体部は大きく屈曲し、受け部の下で垂直に立ち上がる。口縁は低く内傾しながら立ち上がり、口縁端部は丸みをもつ。26 も扁平な天井部をもつが、体部はゆるやかに内傾しながら口縁部へとつながる。口縁部の立ち上がりは垂直気味で、やや外反する。27 は器高が低く、扁球気味の器形である。ヘラケズリが認められず、天井部と体部の明瞭な境はない。直線的にのびる体部から立ち上がる口縁部は極めて低い。28,29 は須恵器高环である。いずれも体部は丸みを帯び口縁は内傾しながら立ち上がり、端部は丸くおさめる。29 の口縁部はより低い。脚部は、いずれも短脚。28 はラッパ状にゆるやかに湾曲しながら広がり、裾の端部はわずかに上方に摘み上げる。29 はゆるやかに内湾するが脚部中位で段を設け、裾付近はやや直線的にのびる。端部はわずかに摘み上げる。30 は須恵器提瓶。口縁を欠損する。31 は須恵器甌。胸部上位に重心がくる倒卵形を呈し、ゆるやかな稜をもつ頸部からのびる口縁部はやや外反し、端部は下唇をわずかに摘み出し面を設ける。外面タタキ、内面には同心円文の当て具痕を残す。32 は土師器高环。环部のみ残存。ゆるやかに屈曲し口縁部は直線的に外傾する。調整は不明瞭。33 ~ 35 は土師器甌である。33 は口縁部が短く、丸みをもち、ゆるやかに外反する。頸部の稜はあまく、胸部にゆるやかにつながる。胸部は張らないタイプか、調整は外面ハケ、内面ケズリ仕上げ。34 はほぼ完形。胸部はやや下ぶくれ気味の球形を呈する。頸部でゆるく立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。外面はタテハケを基本とする雑なハケ、内面はケズリ仕上げである。35 は把手付の甌である。胸部がやや張る倒卵形を呈する、やや内傾する胸部上位から口縁部への移行はスムーズで、口縁部はわずかに外反する。口縁端部付近は丁寧なヨコナデが施され、丸みを帯びる。外面はタテハケ、内面は下位がハケ、上位がケズリ仕上げである。

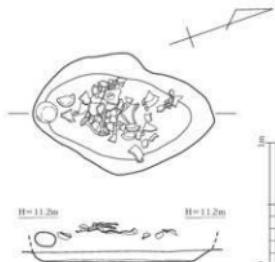


Fig17 SK30 実測図 (1/40)



PL7 SK30 遺物出土状況 (南西から)

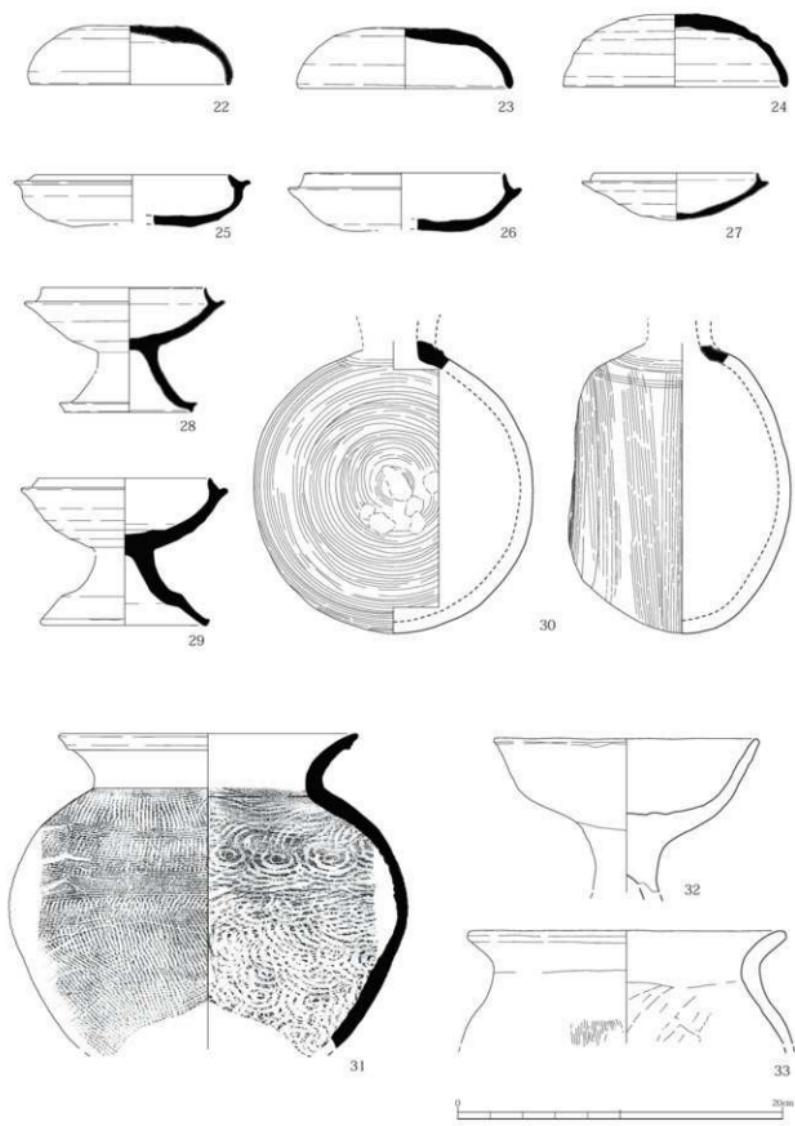


Fig18 SK30 出土遺物実測図 1 (1/3)



22



24



29



32

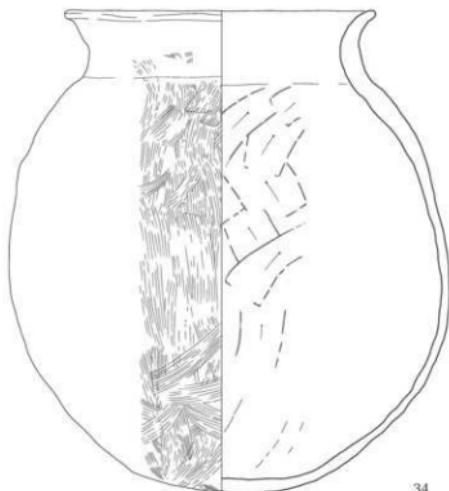


30



31

PL8 SK30 出土遺物 1



34



35

Fig19 SK30 出土遺物実測図 2 (1/3)



34



35

PL9 SK30 出土遺物 2

B - 3 SP07 (Fig20・PL10)

調査区の北東(B-3)で検出した。平面不整形のピットである。長さ65cm、最大幅45cm。深さは約20cm残存しており、擂鉢状に立ち上がる。下記のとおり、高环の脚部が一括して出土しており、何らかの意図をもった遺構と考えられる。時期は、高环から古墳時代中期と考えられる。

36～38は高环である。36は坏部と脚部で接合しない。その他の高环の残存状況から脚部のみであることには意味があると考えたが、同一個体と考えられるため、図上復元している。坏部はやや深く、下位で明瞭な稜を伴い屈曲し、口縁部は直線的にのびる。内外面ともにハケ目仕上げ。脚部は短脚で、スカート状に広がり、裾部はゆるく外反する。37は、裾付近で屈曲して外側に広がる。38は裾部が残存していないが、37同様裾部で屈曲するタイプか。39は粗製の小型丸底壺か。口縁部のみ残存。ゆるく屈曲しながら上へ立ち上がる。

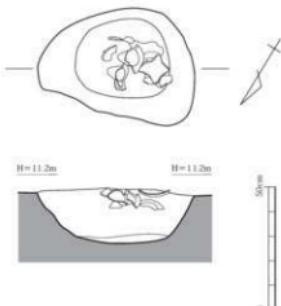


Fig20 B-3 SP07 実測図 (1/20)

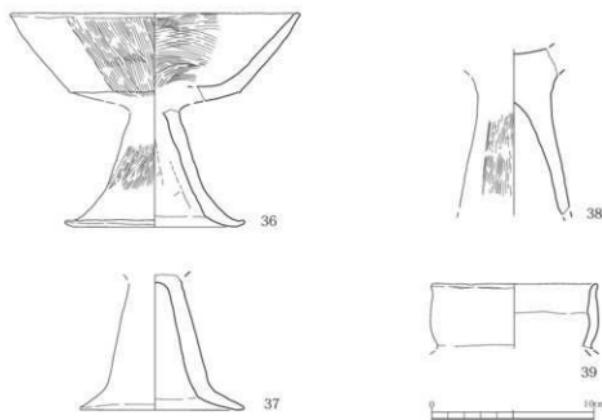


Fig21 B-3 SP07 出土遺物実測図 (1/3)

SX31 (Fig22・PL11)

調査区の西側、地形の落ち際 ($H - 2 \sim 3 \cdot I - 2 \sim 3 \cdot J - 2 \sim 3$) で検出した。当初は包含層として掘削していたが、明らかに自然のものではなく、人力で掘削した痕跡が認められたため、遺構と判明した。また、土層観察の結果、SX31 と SX32 が別遺構で、SX32 に切られるということが分かった。調査区西の河川から東にのび、東端は不整円形を呈し、中心でさらに一段低くなる。絶えず湧水しており、水に関わるものと考えられるが、性格は不明。先述した SK30 の祭祀は位置的にも本遺構に関係するものと思われる。遺構と判断するまで SX32 と分けず掘削したため、遺物は確実に伴う最下層のものを記載した。

40 ~ 42 は須恵器壺蓋。40 は天井部付近は丸みをもち、口縁部付近は直立する。41 は天井部はやや平坦で、口縁部との境は不明瞭のまま立ち上がり、口縁端部がわずかに内傾する。42 は口縁端部が厚く、わずかな段を設け、天井部との境には凸線状の稜をもつ。43 は須恵器壺身。天井部は空気が入り、厚く膨れている。丸みをもつ器形で、口縁部は内傾する。天井部にはヘラ記号が線刻されている。44 は須恵器高杯。脚部を欠損する。扁球形をなし、口縁部は低く内傾する。45 は土師器甕である。長胴形の体部からのびる口縁部は、頸部でゆるく屈曲し、外反する。外面ハケ、内面ケズリ仕上げ。46 は土師器高杯である。壺部は深く、口縁は屈曲部から直線的に立ち上がり、端部付近でゆるやかに外反する。47 は石鎚で混入資料である。

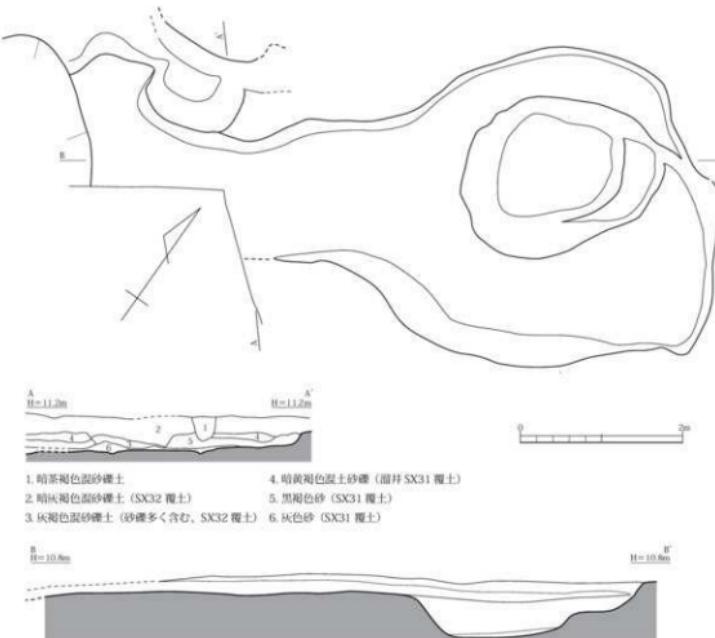


Fig22 SX31 実測図 (1/60)



PL11 SX31・32 (南東から)

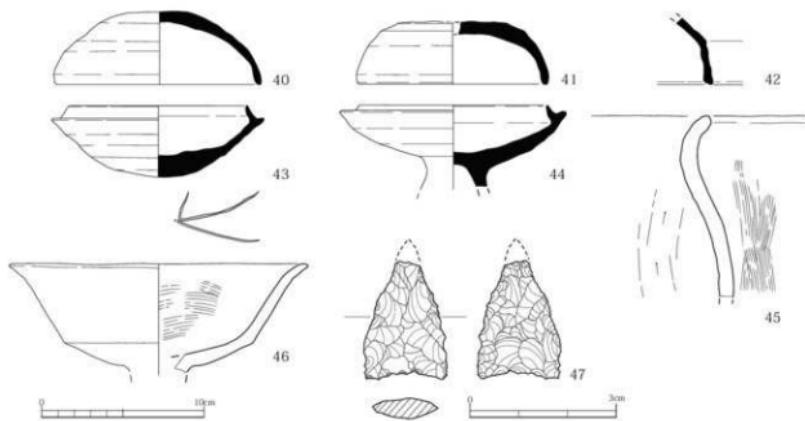
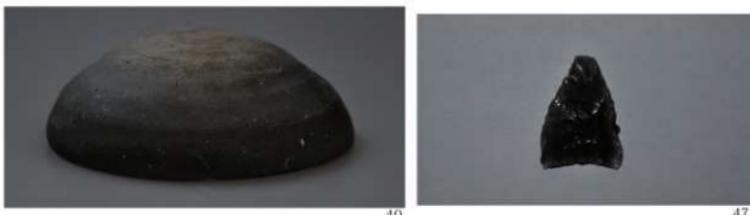


Fig23 SX31 出土遺物実測図 (1/3) (1/1)



PL12 SX31 出土遺物

- 古代の遺構と遺物

SB26 (Fig24・PL13)

調査区の南東端 (A - 6 ~ 7) で検出した。SC01・02を切る。1間以上×1間以上の掘立柱建物である。検出できた柱穴は3基で残りは調査区外へとのびる。全ての柱穴から柱痕跡を確認している。柱間にはばらつきがあり、南北で約160cm東西で約230cmである。出土遺物は土師器および須恵器があるが、いずれも小片で図示し得なかった。

SB27 (Fig25・PL14)

調査区の中央、南壁沿い (E - 4 ~ 5・F - 4 ~ 5・G - 4 ~ 5) で検出した。SC17を切る。2間×1間以上の総柱建物である。柱間の間隔はほぼ揃っており、いずれも160cm前後。床面積は5m以上である。掘方は円形および隅丸方形を呈する。全ての柱穴で柱痕跡を確認しており、うち3基については柱根が残存していた。出土遺物はいずれも小片で、時期を特定できるものは含んでいない。

SB28 (Fig26・PL15)

SB27の西側 (G - 4 ~ 5・H - 4 ~ 5・I - 4 ~ 5) で検出した。軸はSB27とほぼ同軸をとっている。SB29と同一地点で、やや軸を異にする形で検出した。おそらくSB28がSB29を切ると考えられる。調査区外へと広がるため、柱穴はすべて検出できなかったが3間×2間以上の総柱建物である。柱間は若干バラつきがあり、約150cm ~ 180cm。床面積は13m以上である。掘方は円形および不整形で、やや規格性は欠ける。おそらく古代と考えられる須恵器が出土しているが、図化し得なかった。

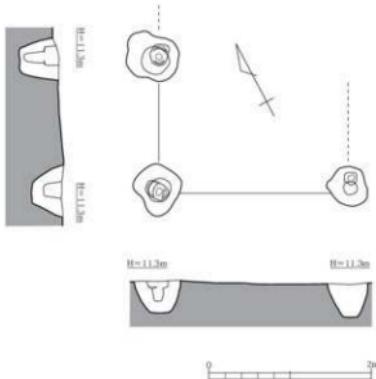


Fig24 SB26 実測図 (1/60)



PL13 SB26 (南東から)

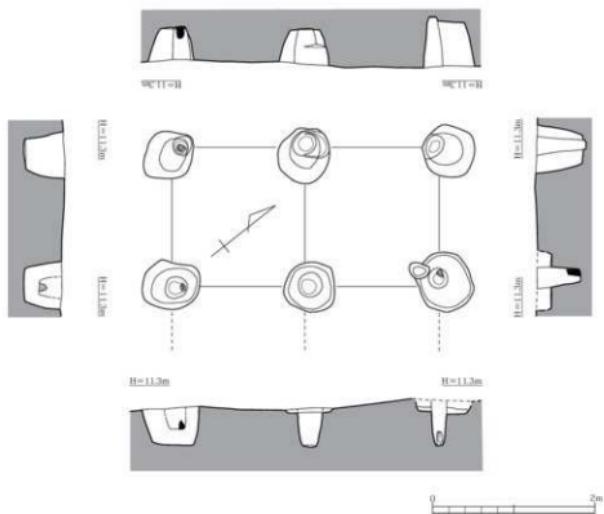


Fig25 SB27 実測図 (1/60)



PL14 SB27 (北西から)

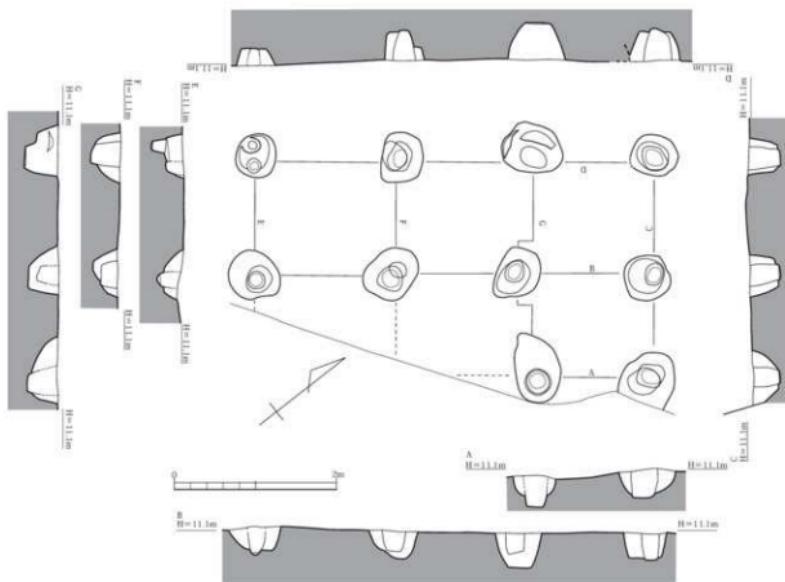


Fig26 SB28 実測図 (1/60)



PL15 SB28・29 (北西から)

SB29 (Fig27・PL15)

2間×2間の総柱建物で、検出した掘立柱建物の中で唯一全体が分かる例である。同一地点で軸を変えて後続するSB28に切られる(G-4~5・H-4~5)。柱穴は円形および不整形で、大きさにはバラつきがあり、深さも均一ではない。柱間は全て150cm前後で、床面積は9.6m²をはかる。他の掘立柱建物同様、時期を特定できる遺物は出土していない。

以上の4棟の掘立柱建物は、SB27で古代の可能性が考えられるのみで、いずれも明確な時期を特定することはできない。しかし、SB27がSC17を切ることから、SB27が古墳時代後期以降のものということは明らかである。これと同じ軸をとるSB28も同時期と考えられ、SB26もほぼ同じ軸をとるため、近い時期の可能性がある。SB28に先行するSB29に関しては、建て替えという積極的な根拠はないものの、そう遠くない時期と考えられる。周辺の調査例では、古代の掘立柱建物を主とする集落が検出されていることから、総合的に判断して古代のものと位置付けておきたい。

なお、SB26・27・28の軸は調査区の西にのびる水域東門ルートとほぼ同軸をとっており、何らかの関係が想起される。

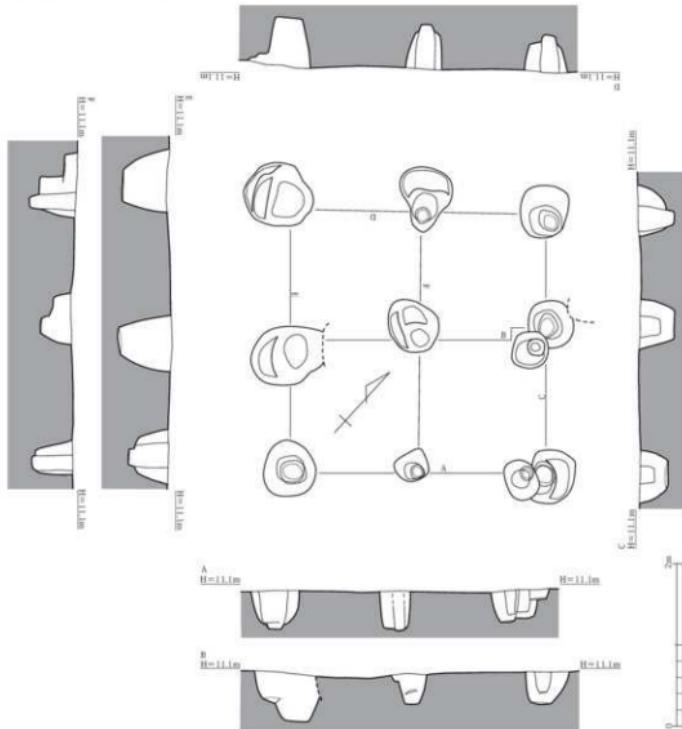


Fig27 SB29 実測図 (1/60)

SX32 (Fig28・PL11)

SX31に後続する不明遺構である ($H = 1 \sim 3 \cdot I = 2 \sim 3 \cdot J = 2 \sim 3$)。当初、SX31と合わせて包含層として掘削しており、SX31の落ち込みを確認した際に遺構であることが明らかになったもので、かつ検出できた北壁の一部以外はSX31と区別せずに掘削したため、この部分の上部は明らかではない。土層観察の結果、本遺構はSX31が埋没した後に再び掘削されたものと判明した。北壁から南にのび、SX31が重なる部分で直角に折れ、西にのびるものと考えられる。SX31同様、性格は不明。須恵器、土師器などが複数出土したが、上述のとおり、SX31と区別がつかないまま掘削したため、かなりの遺物が混入している可能性がある。また、遺構周辺には薄い包含層が堆積しており、これとの分別が曖昧で混在しているものがあると思われる。したがって、ここでは、確実に遺構であり、かつSX31とは別とものと明らかになった後に取り上げたもの、およびそれに近い時期を示す遺物とそれ以外とで分けて記載する。

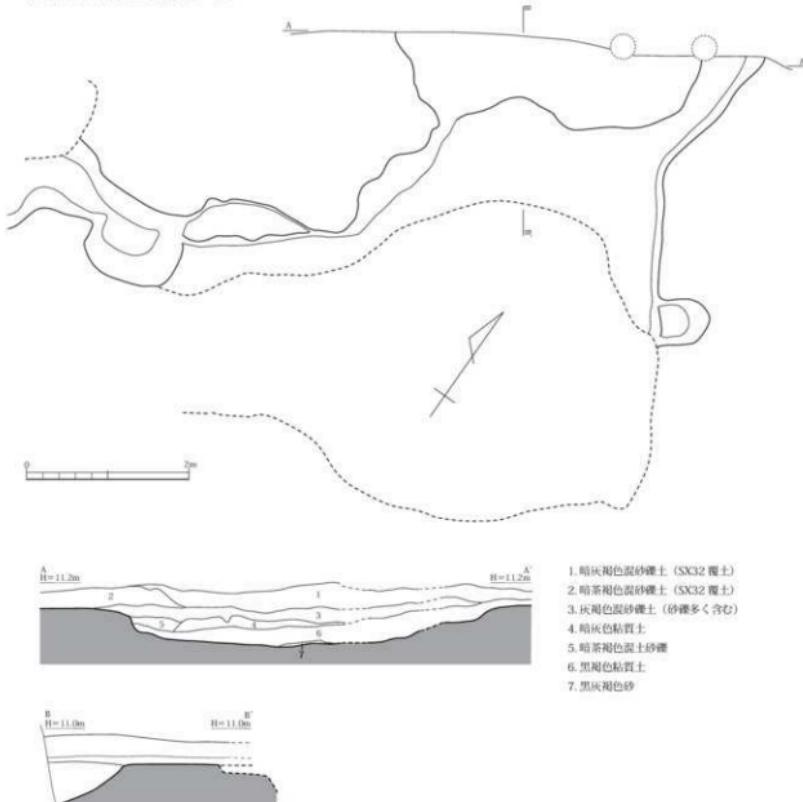


Fig28 SX32 実測図 (1/60)

48～59がこの遺構の時期を示すもの、もしくは近いものと考えられる。48・49は須恵器環蓋である。48は扁平なつまみ部をもち、頂部はわずかに凸状に出る。かえりは退化し、わずかに突出する。49は大型の蓋である。口縁部はほぼ直角に立ち上がり、端部はやや丸みを帯びた面状をなす。50・51は須恵器の高台环。50は若干外傾する体部をもち口縁部は外反する。低い高台はやや丸みをおびる。51の体部は外傾気味に直線的に立ち上がり、高台は外唇を外側にわずかにつまみ出す。52～55は土師器甕。52は胸部が張らず、ゆるやかに外反し口縁部へといたる。口縁部は厚く、端部は丸みを帯びる。外面は雑なハケ仕上げ、内面はケズリ仕上げで、うすい体部との境には稜をもつ。53は口縁部がやや長く、頸部で強く屈曲し、外反しながら立ち上がる。外面ハケ、内面ケズリ仕上げ。54は長脛の体部をもつ甕か。口縁部は頸部で折れ、外傾しながら立ちあがる。外面ハケ、内面ケズリ仕上げだが、調整は雑で器面に凹凸が顕著に残る。55は体部が張らず、口縁までは境をもたないままゆるやかに外反しながら立ち上がる。器壁はやや薄い。外面ハケ、内面ケズリ調整を施す。56は高環である。浅い环部は内湾しながら立ち上がる。摩耗が著しく調整は不明瞭。57・58は土師器环。57は底部にヘラケズリが施されており、丸みを帯び、口縁部との境には稜をもつ。58は外部底面に手持ちヘラケズリを施す。口縁はやや外反しながら立ち上がる。59は用途不明の加工木片である。

60～79は、混入その他の可能性が考えられる遺物である。60～65は須恵器環蓋。60は小型の蓋である。粗雑なつくりで、天井部のケズリは施さない。口縁部はやや下方に突出するが、かえりより短い。61～65は球形を呈する。61は口縁部付近で屈曲し口縁部は直線的に立ち上がる。62は口縁部付近でゆるく内湾する。63・64は天井部から口縁部までゆるやかに湾曲しながらつながる。65は扁平気味の天井部をもち、口縁部は内傾する。器壁はやや厚い。64・65にはヘラ記号が線刻されている。66～73は須恵器環身。いずれも天井部と口縁部に明瞭な境をもたず、66・67の口縁はやや長いが、その他は低く内傾する。66は内面にカギ目を残し、70～73にはヘラ記号が線刻されている。74は土師器甕。器高9.0cm、口径12cm。底部糸切である。75は土師器高环。浅い环部で、底部と口縁の境にわずかな段を設ける。器壁は厚く内外面ミガキ仕上げ。76は機種不明の土器片。須恵質で色調は灰赤色。外面には細筋のタタキを施し、ヘラ状工具で凹線をめぐらせる。内面は當て具痕をナデ消す。色調が新羅焼に類似しており、半島系遺物か。77・78は砥石、79は石斧である。

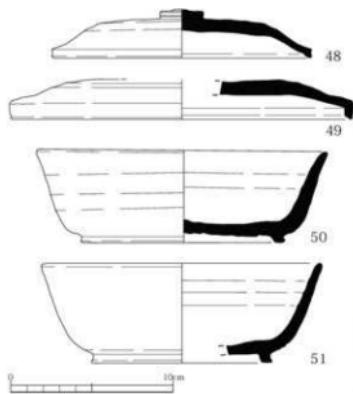


Fig29 SX32 出土遺物実測図1 (1/3)



PL16 SX32 出土遺物1

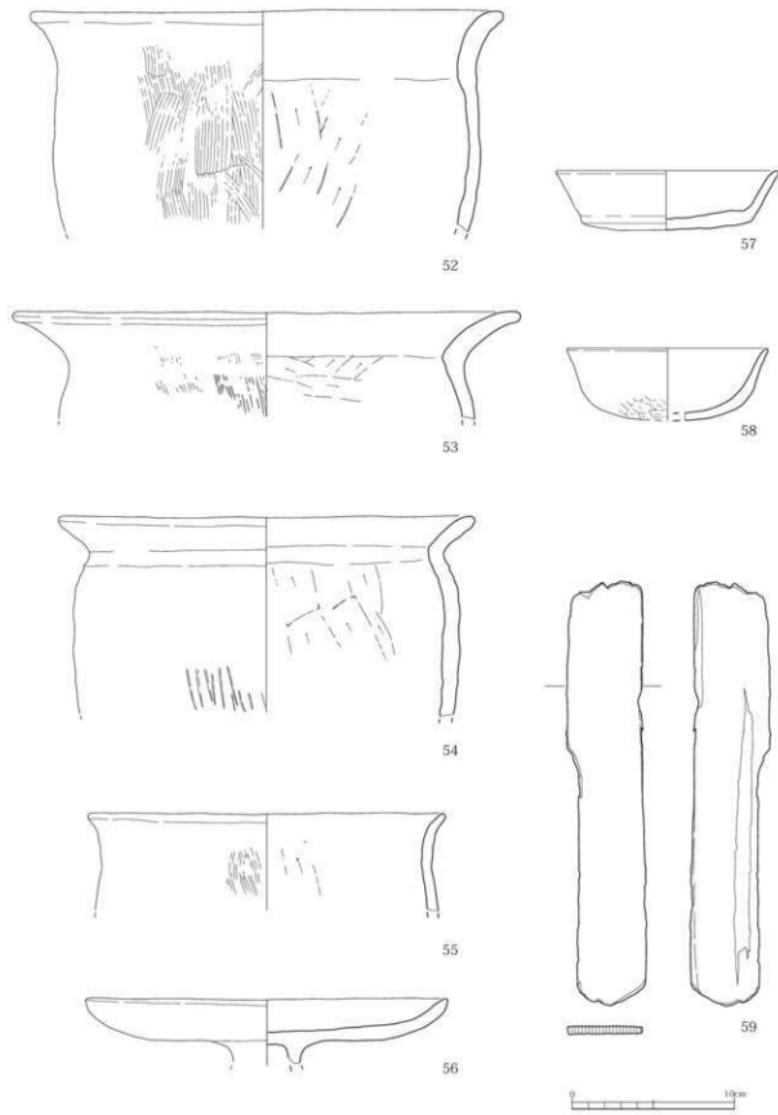


Fig30 SX32 出土遺物実測図 2 (1/3)

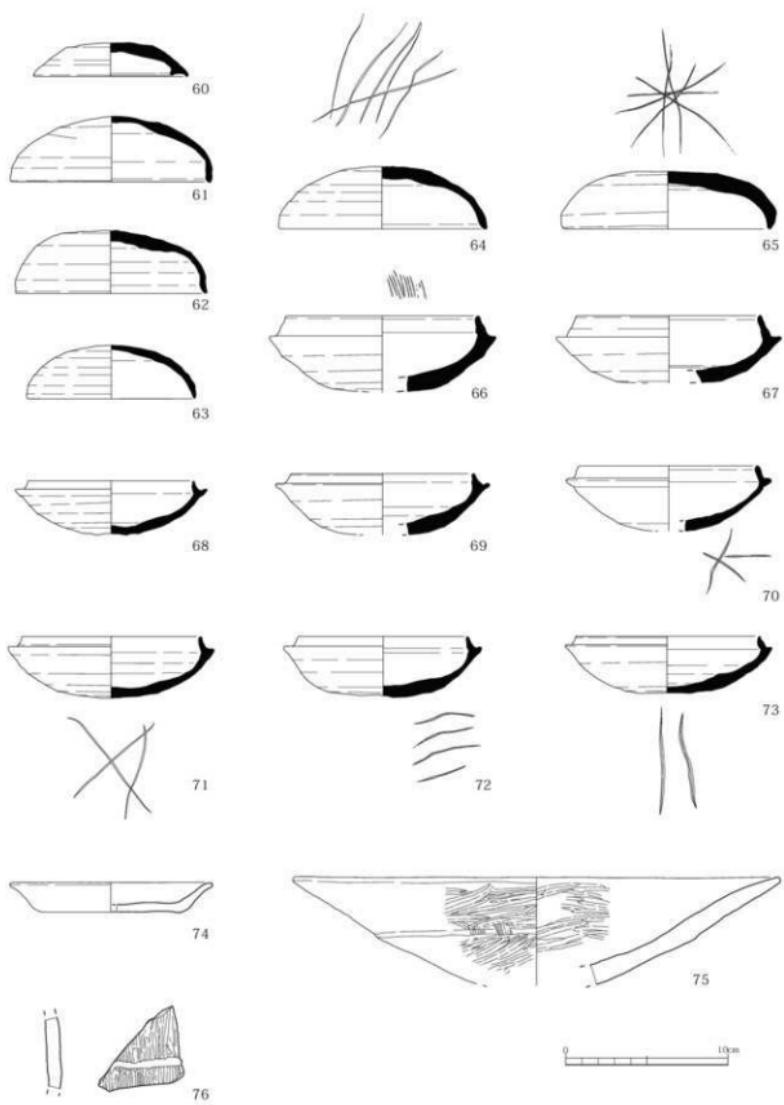


Fig31 SX32 出土遺物実測図 3 (1/3)



60



61



62



64



65



71



72



73

PL17 SX32 出土遺物 2

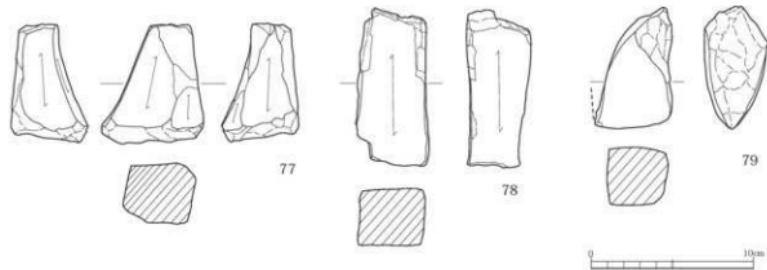


Fig32 SX32出土遺物実測図 4 (1/3)

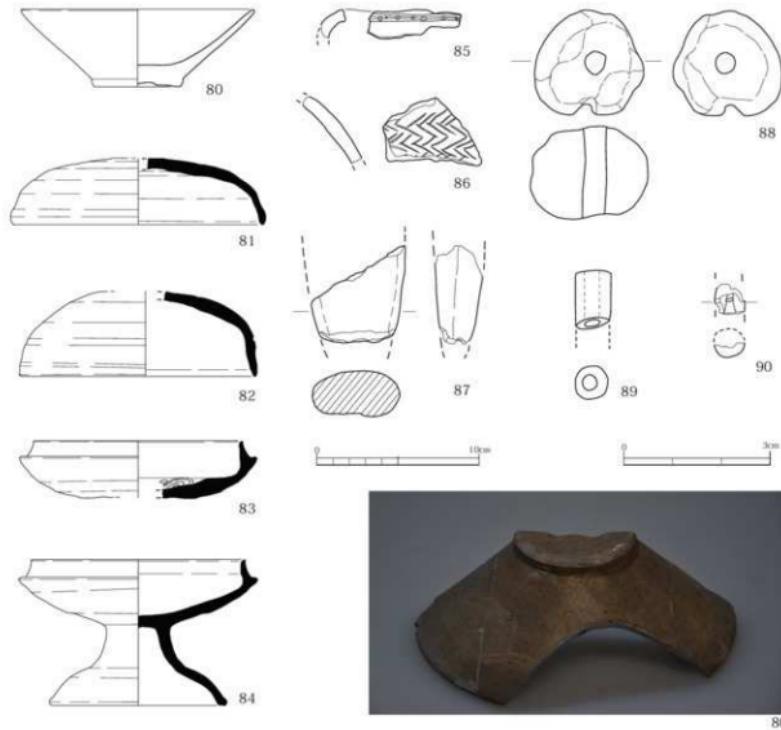


Fig33 包含屑出土遺物実測図 (1/3) (1/1)

PL18 包含屑出土遺物

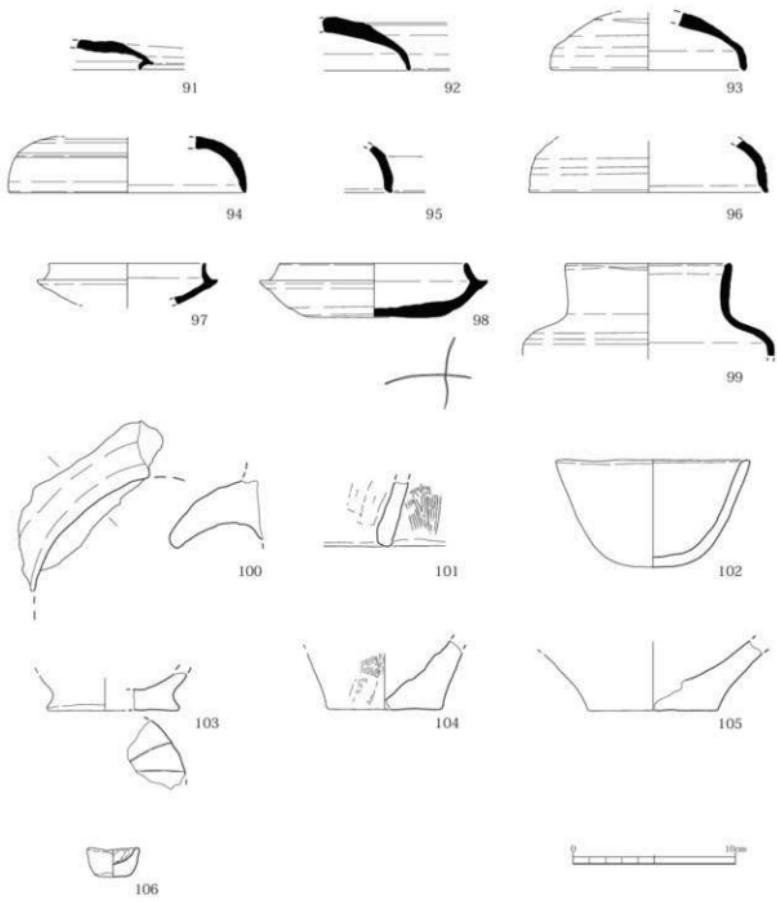


Fig34 ピット出土遺物実測図 (1/3)

・その他の出土遺物

本調査地点は、調査区の中央から西にむかって徐々に地形が下がっており、SB28・29、およびSX31・32付近に薄く包含層が堆積していた。図化可能な遺物は記載しているが、上記のとおり、かなりの数の遺物はSX32で取り上げた可能性がある。確実に包含層から出土した遺物は以下のとおりである。80は越州窯系青磁碗で、いわゆる碗I類で、蛇の目高台からのびる口縁は直行する。81・82は須恵器杯蓋。81はやや扁平、82は球形を呈する。83は須恵器杯身。やや扁平な器形で、口縁部は低く内傾する。内面に当て具痕を残す。84は須恵器高杯。器高が低く、口縁が内傾する。脚部は中位でゆるく屈曲し、裾部は内湾する。85は甕口縁片。如意型口縁で、端部には浅く小さい刻目を入れる。86は壺胴部片。ヘラ状工具による羽状文を施す。87は石斧で、刃部を欠損する。88は土製の玉。89・90は碧玉製管玉である。

91～106はピット出土遺物。全ピットのうち、図化可能なものは全て記載している。91～96は須恵器杯蓋。若干の時期幅がある。97・98は須恵器杯身。98にはヘラ記号が線刻されている。99は須恵器壺で、口縁部が直立する器形。100は移動式竈片である。残存部はわずか。101は甕底部片。102は土師器杯。やや丸底の底部からのびる口縁は直行する。103～105は甕の底部片。103は弥生時代前期、104・105は弥生時代中期のものである。106はミニチュア土器である。

III 小結

本調査地点で検出された遺構は、大きく3時期に大別できる。古い順に、弥生時代前期、古墳時代後期、古代である。弥生時代前期の遺構は土坑4基である。数としては少ないが、土坑のうちSK08からは鉢が良好な状態で出土した。周辺の調査では包含層などを除けば、明確な遺構は3次調査と4次調査でしか検出されておらず、本調査の成果は、わずかではあるが、周辺地域における弥生時代前期集落の様相を明らかにするための資料となり得るだろう。

古墳時代後期の遺構はもっとも多く、本文中に挙げた竪穴住居5棟、祭祀土坑と考えられる土坑1基、不明遺構1基の他、明確ではないが、古墳時代後期と考えられる遺構を数基、柱穴を多数確認している。井相田C遺跡遺跡では3次調査、4次調査地点を中心に古墳時代後期の遺構・遺物が多く確認されており、本調査の成果もあわせて考えると本地域におけるひとつのピークといえる。本調査地点は、3次調査、4次調査地点と同じ微高地に立地しており、集落の中心域と考えられる。

古墳時代後期の住居を切る掘立柱建物4棟は、出土遺物が少なく、いずれも積極的に時期比定することはできない。しかし、1次調査、2次調査地点で、7世紀～8世紀の公的性をもつと考えられる掘立柱建物群が多数検出されていること、それらと近接することから、現時点では同時期もしくは近い時期と考えておきたい。注意したいのは、上記の2地点と、本調査地点が旧河川で分断されること、柱穴や規格性において本調査地点のものが、より強固な高床式の建物と考えられることである。したがって、詳細な時期と上記の2地点との関係については、今後の周辺域の調査事例をまとめて判断したい。

なお、本調査地点では、古墳時代中期と考えられる遺構が1基、および弥生時代中期の遺物が数点出土している。これらは周辺においても決して多く確認されているわけではなく、これについても今後の調査成果に期待したい。



PL19 調査第1区全景（南西から）



PL20 調査第2区全景（南西から）



報告書抄録

ふりがな	いそうだしーいせき 11
書名	井相田 C 遺跡 11
副書名	井相田 C 遺跡第 13 次調査報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1277 集
編著者名	中尾 祐太
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 Tel 092-711-4667
発行年月日	2016 年 3 月 25 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号			
いそうだしーいせき 井相田 C 遺跡	福岡市博多区井相田 2 丁目 2 番 10	40132	2630	33°33'20"	130°27'51"	2014.6.2 ~ 2014.8.27	411	その他

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
井相田 C 遺跡	集落	弥生時代・古墳時代・古代	堅穴住居、掘立柱建物、土坑	弥生土器、土器底、須恵器	

要約	弥生時代前期・古墳時代後期・古代の集落を確認。弥生時代前期の遺構は土坑 4 基。うち 1 基からは跡が良好な状態で出土。古墳時代後期の遺構は堅穴住居 5 棟、土坑 1 基。不明遺構 1 基。古代の遺構は掘立柱建物 4 棟と不明遺構 1 基。掘立柱建物は古代官道と同軸をとる。なお、古墳時代から古代にかけての不明遺構は、水に関する何らかの施設と考えられる。
----	---

井相田 C 遺跡 11

井相田 C 遺跡第 13 次調査報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1277 集

2016 年（平成 28 年）3 月 25 日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1

印刷 (株)西日本新聞印刷

福岡市博多区吉塚 8 丁目 2 番 15

